

# 江戸の時代の盛衰に関わり続けた「御殿山」。

過去から現在、未来へと受け継がれていく「ふるさと大崎」のDNA(原風景)を訪ねる「大崎今昔物語」。

その第十四話は、大崎の歴史を語る上で外せない「御殿山」の話。

居木橋から続く坂道のすぐ先には、江戸幕府の盛衰に関わった“歴史の山”がありました。



## 品川御殿園

徳川家光の家臣、秋元喬知の手により貞享二年(1685)に造営、整備されたとされる品川御殿。敷地には600本もの桜が植えられたほか、別邸としては異例な数の居室を配し、ここでは諸大名を招いた大茶会や幕臣による会議が頻繁に行われていました。



日英修好通商条約の締結に向けて、英国公使エルギンが江戸に上陸したことを報じた1859年発行の英国新聞イラスト(絵の沖合には御台場も望見)。この3年後には御殿山英国公使館焼き討ち事件が勃発します。



ペリー来航後、次々と日本に訪し開港を迫る列国の要求に対し、幕府は御殿山に各国公使館を設けてその対応に当たるようになります。特に、英、米、蘭、仏の4カ国の公使館のうち英国公使館は1万2千坪もの敷地をもつ大規模な施設でしたが、完成前の文久2年(1862)に攘夷派の高杉晋作、伊藤博文、井上馨らによって焼き討ちの破目に遭います。

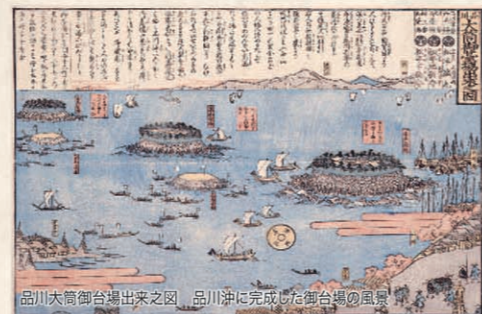


深斎英泉「江戸御殿山桜盛之風景」桜の名所、御殿山の花見に興じる人々



幕府の凋落が加速化します。この事件で再び歴史の表舞台に登場した御殿山。家光による幕府興隆からその崩壊への道程に沿い、時代の分岐点に存在したその名は今、日本の歴史の流れを伝える代名詞として伝わっています。

黒船来航の後、開国を迫る列国の要求に慮って幕府が用意したのが御殿山の外交施設、英国公使館はその代表的なものでしたが、完成前に攘夷派による焼き討ちで焼失。この頃を境に幕府の凋落が加速化します。この事件で再び歴史の表舞台に登場した御殿山。家光による幕府興隆からその崩壊への道程に沿い、時代の分岐点に存在したその名は今、日本の歴史の流れを伝える代名詞として伝わっています。



世絵に描かれ「御殿山の桜」として広く知られていきます。ペリー来航後、幕府防衛の砲台築造、用土砂採掘の地へやがて嘉永六年(1853)のペリー来航により、御殿山は江戸湾防備の砲台場(御台場)築造のため土砂採掘場の一つとして利用されることとなります。御台場築造はペリー来航直後に開始され、翌年には突貫工事の末、品川沖に6カ所の台場が完成となります。この時から花見の名所の御殿山も、その中腹を削られて変貌した姿を人々の前に現したのです。



初代歌川広重「五十三次名所図会三 品川御殿山より中野を見る」お台場築造のため削り取られた御殿山から、海側を望む絵。海上にはすでにお台場が描かれています。

幕府興隆の一つの象徴でもあった品川御殿も、その後元禄十五年(1702)に発生した火災により焼失。以来二度と再建されることはありませんでした。やがて御殿に替わってこの地を賑わしたのが桜。庶民の人氣を集めた花見の名所となり、その風景は多くの浮世絵に描かれています。

「御殿山」の名は、徳川家の別邸「品川御殿」があったことに由来します。また品川御殿そのものは、初代将軍家康が建立したものと伝えられています。古来、品川には格好の鷹狩り場があり、品川御殿は狩りの休憩所として、また時には茶会の場として利用された将軍家御用達のリゾート拠点でした。なかでも特に好んでこの地を利用したのが三代将軍家光。海を一望する風光明媚な立地から、重臣や諸大名を招いた大茶会や政治的行事の場として家光は頻りに御殿山(品川御殿)を利用しています。「鎖国」の断行や参勤交代の制度化など、徳川幕府の権勢を見せつけた家光の、政治的戦略の地として品川御殿は存在したのです。

## 徳川家光が好んだリゾート地、御殿山

江戸時代、歴代将軍の鷹狩り遠征の拠点となった「品川御殿」(御殿山)。特に三代将軍家光が好んで訪れたこの地は、幕府の権勢を高める政治の場として名を馳せた後、末期には幕府防衛の砲台場(御台場)の礎にも。御殿山は、徳川家栄枯の歴史を刻んだ山でした。